平成 28 年度　第 3 回 JSR 編集委員会　議事録

日　時：平成 28 年 7 月 14 日（木）　19：00-21：00
場　所：東京ドームホテル　5 階　「吉祥」
出席者：中村 博亮（担当理事）、川口 善治（委員長）、赤澤 努、伊東 学、江幡 重人、
寒竹 司、税田 和夫、二階堂 琢也、長谷 斉、長谷川 和宏、福岡 宗良、
平林 茂（ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）　（以上、12 名）
欠席者：青田 洋一、石井 賢　（以上、2 名）

【確認事項】
一同、第 2 回 JSR 編集委員会議事録を確認した。

【議題】
１．JSR 担当理事交代挨拶
中村博亮理事より、理事交代の挨拶が述べられた。
また中村理事が、委員長は委員会での互選であるが、自分が交代間もないため、経験豊富な川口先生に引き続き委員長を継続してほしいがどうかと提案し、満場一致で承認した。

２．関連学会の編集委員長交代報告、挨拶
江幡 重人委員より、日本低侵襲脊椎外科学会の編集委員交代にあたり挨拶がなされた。

３．企業からの広告申込報告（資料 1、別添資料）
川口委員長が、現在募集中である第 8 巻の広告申込リストを示した。
事務局鈴木が、先般の委員会で企業の予算計画の都合上、例年よりも早く趣意書を出したほうがよいとの結論に至ったため、すでにリストにある企業には送付済みであると報告した。
川口委員長が、現状応募のない企業について、例年通り委員に割り振りをし、電話等をかけて直接依頼することになると説明し、一同承知した。ついては、事務局からリストを川口委員長へ送り、川口委員長が担当を割り振り、委員へ連絡することになった。

４．分担金に対する JSSR の考えの確認
平林アドバイザーが、分担金について理事会で金額を下げる方向ですでに決議されているがいくら下げるなど詳細な金額は決まっていないこと、金額について理事会では 75 万円（現状の半額）を提示したが、100 万円程度（50 万円マイナス）が妥当かと考えていると説明した。

川口委員長が、委員長就任当初の 4 年ほど前は、学会は赤字であり JSR 誌も大きな赤字を計上していて持田前理事長よりなんとかするようにと指示を受けたが、現在学会の財政は立ち直って潤沢になっているため、値下げについては今提案すべきと考えていると発言した。
福岡委員が、東海脊椎脊髄病研究会は JSR 以外に独自の学会誌も作成しており、分担金の今後の成り行きによっては JSR 誌を辞めるといった意見が学会内から出る恐れもあると発言した。
長谷川委員が、英文誌の創刊もあり、その予算が担当出版社（杏林舎）から出されているがあくまで予想のため、英文誌にどの程度費用がかかるかを１年ほど見てからでもよいのではないかと意見を述べた。
今後の理事会等での情勢を確認しながら検討を進めることになった。

５．第７巻の発刊予定状況（資料 2)、第８巻以降の編集について

第７巻の発刊予定状況について、編集分室からの資料を基に川口委員長が説明した。現状来年の 1・2 号までは発刊できそうだが、5 号・9 号分から原稿が足りなくなるとして、投稿数や原稿を増やすための検討を行った。
川口委員長：昨年まで JSSR 学術集会での発表で査読評価の高かった 50 題に依頼していたところを、100 題まで枠を広げて依頼した。それでもこのような状況なので、JSSR 学術集会のシンポジウムやパネルディスカッションでの発表についても声をかける。英文誌『SSRR』に投稿された原稿であってもケースレポートであれば JSR に掲載する。
長谷川委員：刊行号数を減らすことはできないか。
平林アドバイザー：日本医学会加盟のための条件として、毎月学会誌を発刊していることがあるため減らすことはできない。
長谷委員：主に若手の先生方が組織している活発な研究会などにも投稿を呼びかけてはどうか。JSR に加盟して特集号を担当する希望がある研究会はないか、声を掛けるのもよい。「いくつかの研究会の論文が掲載される特集号」があってもよいと思う。
長谷川委員：いきなり研究会が特集号を担当するは難しいと思うので、まずは各研究会に呼びかけて投稿を促してはどうか。

いくつかの研究会の名称や事務局担当の医師の名前が提案され、それぞれ親しい委員が声をかけることになった。
長谷川委員が、現状埋まっていない 5 月号と 9 月号の投稿締切はいつになるかと編集局尾島氏に尋ね、尾島氏が 5 号は 9 月末、9 号は 12 月末と回答した。
中村理事が、もし今名前が出なかった研究会でも、独自の学会誌をもたないところがあればあとからでも提案してもらえれば声かけを行いたいと提案した。

６．今後の JSR の発刊の見通し（資料 3）
議題 5 で審議。

７．二重投稿に関する報告と見解（資料 4・5）
川口委員長が、これまで JSR 編集委員会として示してきた二重投稿に関する姿勢や指針を、平林アドバイザーの最新提案とともに示した。
そのうえで、このたび JSR に投稿され、現在寒竹委員が査読中の論文（以下、便宜上Ａ論文）内容が示され、二重投稿であるか一同確認し、内容はほぼ同一のものとの見解にいたった。
JSR 編集委員会として、二重投稿について今後どのように対応していくか検討した。

長谷川委員：よりわかりやすいチェック表のようなものがあればよいのではないか。他誌に掲載していた場合は、原著論文から総説などに形式を変えてなら掲載してもよいと考える。今回のＡ論文については、著者からの現状のチェック表（他誌に投稿したかのチェック欄）の回答はどのようになっていたか。
平林アドバイザー：以前二重投稿と見なされた論文は、このチェック表が「他誌に投稿していない」という内容になっていたことが問題だった。
編集分室尾島氏：依頼論文のため、チェック表がないものがある。Ａ論文について、チェック表が出されていたか、出されていればどうなっていたか確認する。
長谷川委員：依頼文についても、どのような依頼を出すかを再検討したほうがよい。依頼された論文なら、他誌に出していても問題ないと勘違いしてしまうケースもあるように思う。また同時に投稿規程も見直す必要がある。
赤澤委員：おそらくＡ論文については、「依頼されたので」と特に他意はなく投稿したのだと思われる。Ａ論文の著者のように間違った認識をもっている会員もいるため、依頼時の伝え方に気をつけるか、会員に周知するかしたほうがよい。
伊東委員：他誌に出したものなのか、出されていないものなのか等、どのような立ち位置の論文なのかを、しっかり明示していれば問題ない。平林アドバイザーの最新提案のように、論文のはじめに断り書きがあるなどして情報が開示されていればよい。
川口委員長：英語を日本語に翻訳しただけのような論文については、JSR 誌は「英語論文を読める層」が読むのであまり意味がなく、雑誌の質が下がらないか。
事務局鈴木：前回の会議で二重投稿を取り上げた際に、そのあたりは場合に分けて詳細に検討したので、前回議事録を再確認してはどうか。
長谷川委員：二重投稿に関して、何か基準を決めたほうがよいと思うが、どこが最終決定するのか。
中村理事：検討は委員会でし、承認は理事会でする。
長谷川委員：総説だけの号や、原著と総説が混じるような号があってもよい。

川口委員長：テクニカルノートのような原稿が載っていてもよいと考える。

以上のような議論の後、川口委員長がいったんこの問題について整理する必要があると発言しペンディングとなった。A論文については、査読結果を戻す必要から、迅速に検討することになった。
また、二重投稿については会員の認識を共通化するためもあり、JSR 編集委員会からお知らせを作成して全会員へ通知することになった。

８．英文誌刊行についての説明

川口委員長が、英文誌『SSRR』について 2017 年 1 月の発刊を目指して準備中であり、投稿規程についても近日定まる予定であると報告した。投稿は 10 月から開始する予定であると説明した。

９．その他

次回は 10 月の基礎学術集会中の開催を予定し、日時は 10 月 14 日（金）朝 7：00～を予定。

以上